

コラム 10

DDR とは？



DDR 開始式典で銃を燃やす（中央エカトリア州）

スーダンのように、紛争が続いた国では、紛争が終わるとこれまで戦っていた兵士（政府軍や反政府軍に限らず）は削減される。これが遅れると、人件費がかさむだけでなく、不満を持った兵士が反乱を起こしたり、犯罪を起こしたり不安定要素となるため、大事な取り組みだ。DDR とは、Disarmament（武装解除）／Demobilization（動員解除）／Re-integration（社会再統合）の略で、平たく言えば、兵士に別の仕事についてもらい、復興を担ってもらうことである。

このプログラムのひとつとして、よく職業訓練が含まれる。大工、石（レンガ）工、自動車整備などがメジャーな科目であり、南スーダンでは、政府機関や NGO が取り組んでいる。スーダンでも、膨大な人数の除隊兵士がいる・あるいは予定されているが、それだけの数の訓練生はとも政府系の職業訓練センターなどでは対応できないため、NGO などが様々なプログラムを行っている。

これらの多くのコースの大部分は、3ヶ月程度の短期のもの。一時期、除隊兵士を吸収できて、よかったということになるのだが、この分野の専門家によると、これまで武器を持つことしか知らなかった人が3ヶ月の訓練コースを受講しても、なかなか仕事にありつけるだけのスキルが身につかない（ことが多い）のが現実とのことだ。

もちろん学ぶことは技術のみではないだろうが、結局仕事を得られないと、街に失業者があふれて、社会不安になりかねない。では、十分な技術が身につくまで、長期間のコースを実施するかというと、それだけのコースを実施できる訓練機関は限られており、対象にできる人数が限定的。限られた資源（予算や体制）をどのように配分するかという問題は色々な要素があり難しいところだし、政府や援助機関の会合でも話題になる。

以上